

平成23年度 清水町教育委員会の活動状況に関する 点検・評価報告書

点検・評価の概要

教育委員会は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律により、毎年、事務の管理・執行の状況について点検・評価を行い、その報告書を議会に提出するとともに公表することが義務付けられています。

また、その際、客観性を確保する観点から、教育委員会以外の学識経験者による知見の活用を行うこととなっています。

清水町教育委員会としては、この点検・評価を、本町の教育資源を有効活用し効果的な教育行政の推進を図るための確認の機会であると捉えるとともに、住民への説明責任を果たすことができるよう進めていきます。

評価対象は、年度当初に示す教育行政執行方針に基づき実施する事務事業のうち、本町の教育行政として特色ある事務事業としました。

また、点検・評価報告書の作成にあたっては、選定した事務事業の推進状況を自己評価し、外部知見の活用として学識経験者から意見をいただき、今後の教育行政に活かすこととしています。

なお、報告書は毎年度議会へ提出し、公表します。

学識経験者として、北海道教育庁十勝教育局及び前社会教育委員長からそれぞれご意見をいただきました。

点検・評価した項目

清水町の教育行政の中で特色ある事務事業として次の8項目を選定しました。

町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進

全国学力・学習状況調査問題を活用した北海道における学力等調査結果を受けての取り組み

就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進

「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取り組み

生活習慣を身につける生活リズム向上推進事業

清水の子どもにこにこプラン事業の取り組み

地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣制度

子どもたちへの読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進

現状と成果

清水町教育理念「心響」～打てば響く 心に響く～を基軸として、“心を通わせ、互いに響き合う感性豊かな教育の推進”を目指し実践指標“しみず「教育の四季」”を平成18年4月に宣言して6年になりました。以来、家庭・学校・地域が連携して、「あいさつ、返事、後片付け」「早寝、早起き、朝ごはん」「お手伝い、家庭学習の習慣化」など、子どもたちの基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る教育活動を展開してきました。

本年度についても、4月に推進協議会を開催し、前年度の実践の成果と課題等の協議及び一年間の活動計画を確認して、“しみず「教育の四季」”を幼稚園や各小中学校の経営の中核に据え、教職員の共通理解の基に児童会や生徒会での活動やPTAへの啓発活動を推進してきました。

主な具体的な取り組みとしては次のとおりです。

4月に「教育の四季」リーフレットを町内全戸に配布。一昨年度と同様に保護者対象の「基本的な生活習慣」のアンケート調査を実施し、集約・分析を行い、結果を配布により幼稚園や保育所、各小中学校の運営の参考資料として活用。「子どもフォーラム」を開催し、町内小中高の「いじめ撲滅」などの活動報告及び意見交換を行い、各教育関係者から指導・助言。町内各保育所や幼稚園の保護者参観日に「教育の四季」の趣旨や取り組みについて説明し、就学前教育の重要性について周知。高齢者学級講座で「教育の四季」の実績を報告して、子どもたちの健全育成への理解と協力を求める。町内保育所、幼稚園、小中高から、毎月子どもたちや教職員の「ちょっといい話」を集約して配布し、それぞれの教育活動への啓発。

今後の課題

- ・“しみず「教育の四季」”の「12の窓」の取り組みについて、今後とも広く町民への啓発活動を推進していく必要があります。
- ・幼保・小連携による就学前教育の充実と発展を図るとともに、子育て支援課などの関係部局との連携の基に就学前教育の重要性の啓発に努め、家庭教育への支援に努めていくことが重要となっています。
- ・町民総ぐるみの教育活動を展開するために、学校支援ボランティアなど地域の教育力を活用した開かれた学校づくりや各町内会組織及び各種団体等への浸透を図っていくことが大切です。

今後の対応策

- ・「教育の四季」の全戸へのリーフレット配布など、更に町民全体への浸透を図ります。
- ・保護者を対象とした「子どもの基本的な生活習慣」アンケート調査を実施してその分析・結果を今後の子育て資料として活用していきます。
- ・「子どもフォーラム」を継続開催し、小中高の児童・生徒の実践交流を深め、事業推進の原動力とします。
- ・町内小中学校はもとより、各保育所、幼稚園の保護者や高齢者への浸透を図っていきます。

学識経験者の意見

1年間の実践の振り返りや基本的な生活習慣に関するアンケートの活用等、“しみず「教育の四季」”をよりよい方向に推進しようとしており評価できます。

今後は、取組内容等が詳しく理解できる意見交換会を開催するなど、対応策について話し合える機会を設ける等、より一層の充実に期待します。

日常生活の中で、ごく当たり前のことを行うことの大切さ、重要性を呼び起こす契機となったこの「教育の四季」の提言は、極めて適切なものでした。

現在は、各学校の教育活動に位置づけられており、更にフォーラムやアンケートも実施されていることから、望ましい地域社会の形成に貢献していると思います。

全国学力・学習状況調査問題を活用した北海道における 学力等調査の結果を受けての取り組み

現状と成果

小学校6年生及び中学3年生の全児童生徒を対象とする平成23年度全国学力・学習状況調査が4月に実施予定であったが、東日本大震災などにより見送りとなり、北海道は9月27日に「全国学力・学習状況調査問題を活用した北海道における学力等調査」として実施し、本町の小中学校も全校が実施しました。

その調査結果概要が12月21日に公表され、本町における教科に関する調査（国語、算数・数学）の平均正答率は、小学校・中学校とも北海道平均を上回ることができました。しかし、小学校の全教科における活用に関する問題と、中学校の数学における知識に関する問題に課題が見られ、なお一層、指導の工夫改善等を図る必要がありました。また、学習状況に関する調査では、昨年度調査と同様、全道に比べ基本的な生活習慣が定着しており、自尊意識・規範意識についても全道より高い傾向にありました。

これらの調査結果を踏まえ、教育委員会として学校改善支援プランを作成のうえ各学校に示し、各校においても調査結果を生かした今後の指導について具体的方策をまとめ、保護者にお伝えしたところです。

今後の課題

- ・本調査で測定できるのは学力の一部ではありますが、調査結果を受けて各学校で学力・学習状況を把握・分析して、教育の成果と課題を継続的に検証し、教育指導や学習の改善等に役立てていく必要があります。
- ・本町の児童生徒は、家庭での学習時間が小学校と中学校とも昨年より上昇しました。家庭学習習慣は概ね定着しており、その中でも基本的な生活習慣が身に付いて、自尊意識・規範意識が高く、学習に対する関心・意欲のある児童生徒については、教科に関する調査の正答率が高い傾向にあります。このことは、これまで取り組んできた小学校低学年の少人数学級、幼保・小連携の施策や“しみず「教育の四季」”などの実践が影響していると考えられるので、それらの施策の継続が必要となっています。

今後の対応策

- ・各学校との連携を図りながら、小学校低学年における少人数学級の継続、幼保・小連携を重視した就学前教育の充実を推進し、児童生徒の学習意欲を高めるための学校の取り組みを支援していきます。
- ・規範意識の向上による学習習慣の確立や、基本的な生活習慣の育成を図り学びに向かう姿勢の向上のため、“しみず「教育の四季」”の普及啓発を推進します。
- ・教員の資質向上に関わりましては、学校教育課教育指導幹の学校訪問、外部講師の活用、十勝教育局指導主事派遣の要請、地域の人材による学習指導に関する支援体制を工夫していきます。

学識経験者の意見

全国学力・学習状況調査問題を活用した北海道における学力等調査の結果を踏まえた学校改善支援プランを作成し、各学校における具体的な指導の改善に生かすとともに小学校における少人数指導など個に応じた指導の充実を図っており、評価できます。

今後は、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得に向け、見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の一層の充実を期待します。

各学校では、学力調査の結果を分析し、検証を行って、教育活動の改善・充実に努めているようです。教師一人一人の研修も当然重要ですが、全職員が一丸となった校内研修の充実を図り、更に成果を上げるよう期待しております。

就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進

現状と成果

平成 15 年度に「特区」を活用した小学校低学年における 20 人程度の少人数学級を具現しました。これは、生活集団と学習集団の一体化の中で、規範意識や躰、マナーの日常化を図るきめ細かな学習環境を整備するものでした。

その理念の延長線上に、就学前教育の充実の必要性を強く感じられたことから、町内の幼稚園・保育所と小学校のなめらかな接続を図るために、次の視点から調査・研究を進めました。それは、教育課程と保育計画とのつながり、教師と保育士との連携と研修、幼児と児童の学びと遊びの交流などでした。

調査・研究は、平成 17 年度から 2 カ年、道教委の委託を受けて、理念と実践とを指導機関の協力のもと進めたところです。

平成 19 年度以降は、2 年間の調査研究事業の成果と課題を踏まえ、無理の無い範囲で幼保・小のなめらかな接続を図る取り組みを継続実施しています。

具体的な取り組みは、清水地区と御影地区の 2 ブロックに連携推進会議を設け、幼児と児童の交流はもちろんのこと、教師と保育士との交流及び研修を通して互いに指導・援助の違いなどの共通理解を図り、発達や学びの連続性を重視した活動を行っています。

今後の課題

- ・基本的な生活習慣や思いやりの心をはぐくむ教育活動を幼稚園・保育所、小学校が同じ目線で一貫した取り組みをしていくことが大切であり、教師と保育士との間の情報交流や相互理解を図るためにも幼保・小連携の継続的な取り組みが求められています。
- ・そのためには、連携の取り組みを継続することの重要性を全体で認識し、交流活動のねらいや方法について改善を重ねていくことが大切です。
- ・連携を図るためには、保護者や地域の理解や協力を広めることも必要となります。

今後の対応策

- ・新しい保育所保育指針や幼稚園教育要領、小学校学習指導要領においても幼保・小連携が明記され、今後も重要な課題として位置づけられました。道内においても先進的な取組事例として高く評価をいただいているところですが、無理なく継続することが大切であり、清水町幼保・小連携協議会では連携の柱となる骨格を協議し、実践面の取り組みは各ブロック推進会議で担当教員を中心に連携を推進していきます。

学識経験者の意見

幼児と児童の交流の機会を設けたり、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭との合同研修を行ったりするなど、「幼保・小のなめらかな接続」に向けた取組を推進しており評価できます。

今後は、保育士・幼稚園教諭、小学校教諭による合同研修において、小学校入学後の約一か月の指導内容と配列について意見交流することにより、小学校におけるスタートカリキュラムの作成に取り組むなど、発達や学びの連続性を意識した取組が一層推進されることを期待しています。

子どもに教育を受けさせることは三大義務の一つであり、学校教育は幼児教育と違った親の責任があります。子ども同士の交流はもちろん大切ですが、保護者の交流もより大切なことだと思います。

「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取り組み

現状と成果

食育については、「おいしい笑顔が見える給食」と「考える給食」を合言葉に、毎月発行の「給食だより」で、給食を通して児童生徒に正しい食事の取り方や望ましい食習慣を身に付けさせるなど、食に関する指導の充実を図るとともに、地元産の食材を多く利用したメニューを取り入れています。

また、給食センターに隣接する試験ほ場の耕起作業などを関係機関の協力で整備し、除れき作業やトウモロコシの種まきを清水中学校1年生の授業の一環で実施しました。試験ほ場で栽培した野菜は、小学校児童の給食センター見学の際に収穫を体験させ、実際の給食に使用しました。最後に収穫した爆裂種のトウモロコシは、清水中学校1年生の家庭科の授業の中で生徒によるポップコーン作りの材料として乾燥と調理を実践しました。

なお、独自メニューとして次の取り組みを行っています。

十勝清水の恵み給食～清水産の食材を使ったメニューとすることで、町内ではどのような食物が生産・加工・販売されているのかを理解することに役立っています。

児童が考えたメニュー～小学校6年生の児童が、食べることや食べてもらうことの大切さなどを学習した上で考えたメニューを、全国学校給食週間の一環として実際に提供する給食として紹介し、献立作りへの子どもたちの関心も高まっています。

バイキング給食～小学校6年生、中学校3年生の卒業を祝うため実施していますが、継続を待ち望まれています。

今後の課題

- ・共同調理施設は、現施設が平成9年度に整備されてから15年を経過しており、調理設備の故障や器具・備品の傷みが激しくなっており、衛生管理面からも適切に設備や備品の更新を図っていく必要があります。
- ・昨年、道内の共同調理場で発生した集団食中毒事故や福島第一原子力発電所の事故による食品中の放射性物質の問題などで、従来以上に安全で安心な給食提供が求められています。

今後の対応策

- ・地産地消の推進のため地元農業者等の連携を継続するとともに、地場産物を活用した献立を児童生徒から募集し、地場産物の活用により児童生徒の興味関心を高め、感謝の心を養います。
- ・試験ほ場の収穫物を給食に活用することにより、野菜について考える給食を実践し、野菜をおいしく食べる工夫を図ります。
- ・既存の独自メニューを継続します。

学識経験者の意見

学校給食を教材として活用しつつ、給食の時間はもとより、各教科や特別活動等の教育活動全体を通して、食育を推進しており評価できます。

今後は、給食だよりの発行や地場産物の活用の一層の充実をとおして、児童生徒が地域の産物や食文化等を理解し、望ましい食習慣を身に付けることができるよう取組を推進することを期待します。

教育の中で、「食」の教育は重要な位置を占めています。地産地消を含めて、各関係者の連携も重要であり、子どもたちの地域社会の理解に大いに役立つものと考えます。

生活習慣を身につける生活リズム向上推進事業

現状と成果

家庭におけるライフスタイルの変化により、人や社会との関わりが子どもに不足し、生活体験や自然体験の豊富な子どもほど、道徳観や正義感が身についているといった調査結果が出ています。

この様なことから、児童期に「早寝、早起き、食事、挨拶、後片づけ、遊びなど」の基本的な生活習慣を身につけることが重要であると考え、事業を実施しています。

本年度は5回目の開催となり、昨年の事業反省をふまえ、清水小及び御影小の5年生以上各学校10名を定員に6泊7日の期間を設定して募集致しましたが御影小からの7名の申し込みとなりました。

開設当初より御影からの申込が多く、清水からの申込が少ない現象がみられましたが、継続して参加する児童が多い事から偏った参加状況になったと考えられます。

今回も職員6名と協力スタッフとして清水町女性団体連絡協議会より15名のご協力を頂き運営を行いました。

子どもたちはモデル的生活リズムでの生活により、普段体験することの少ない家事全般を体験し生活することの苦労を実感し、家族（お父さん・お母さん）の大変さを感じたようです。

今回の通学合宿には継続して6名が参加しており、生活習慣に対する知識と経験を思い出し繰り返すことで更なる成果が得られたと感じました。

期間中は決められた学習や家庭での身の回りの行わなければならない事が多く、自由な時間はとても少ない環境でしたが、遊び時間を工夫の中から作り出していました。この過程にも仲間作りの効果が現れていました。

更に、研修終了後の保護者へのアンケート調査を行い、家庭での変化について調査し、プログラム作成の参考にしました。

なお、清水小学校4年生の父母数名から参加について検討していた旨の問い合わせがありました。

今後の課題

- ・参加者が御影に集中し、学校生活の延長上の交流となってしまった。通学合宿にメリハリを持たせ交流を図れる生活環境を作るためにも清水からの参加者をバランス良く募る事が必要です。
- ・今後も保護者及び児童への事業PRが必要です。

今後の対応策

- ・参加した児童が生活習慣として実践できるよう、保護者の理解と保護者自身の生活習慣の改善を求める取組を検討します。
- ・高校生や生涯学習ボランティアを活用し、子どもの学習やメンタルヘルスキアの充実を図ります。

学識経験者の意見

一週間という長期間にわたる通学合宿の開催は、学習習慣や規則正しい生活リズムを定着する上で非常に効果的と考えられており、モデル的生活リズムを児童に体験させる事業として評価できます。

今後は、家庭においても引き続き取り組めるよう保護者対象講座の実施、生活リズムチェックシートの活用など、家庭と連携した取組を進めるよう期待しています。

家庭生活の現状をみると、この体験活動は極めて大切なことだと思います。今後もPRに努めるとともに、広く活動を紹介する等、多くの子どもたちが参加するよう期待しています。

清水の子どもにここプラン事業の取り組み

現状と成果

清水の子どもにここプラン事業は、文部科学省が実施している放課後子ども教室推進事業に基づき、放課後や週末に子どもたちの安全・安心な居場所を設け、子どもたちが地域社会の中で心豊かで健やかに育まれる環境づくりを実施しています。

このプランは、文部科学省と厚生労働省が連携して設置している放課後子どもプラン推進事業に基づき、本町でも社会教育課と子育て支援課が連携して、カワウソ教室事業（放課後子ども教室推進事業） 学童クラブ事業（放課後児童健全育成事業） 連携活動（放課後、週末の団体活動）の3事業で実施しています。

カワウソ教室事業は、清水小学校の余裕教室を主会場に、学童クラブと連動して年間242日間実施しました。

参加児童は、清水地区は105人の登録者と学童クラブ児童がともに活動しました。

指導者は、年間を通して活動してもらう教室指導員を昨年より増やし、日々の教室を指導しコーディネーターを2名配置しました。

清水地区においては、学童クラブと一体的に運営したことにより、日常的な放課後の居場所としての位置づけが明確になりつつあります。そして保護者からは、放課後の居場所として理解され始めました。

今後の課題

- ・学童クラブと一体的に運営したことにより、プログラムが融合する反面、各々の事業の特色が薄まりつつある。
- ・多様な児童が常時参加していることにより、その指導や健全育成に際し指導員が、戸惑いを感じるが増えつつある。

今後の対応策

- ・活動内容においては、子ども教室の目的である体験活動等をさらに提供できるように、学童クラブ等と調整しながらプログラムを開発していきます。
- ・児童の指導・健全育成においては、学校教員と連絡を密にするとともに指導者の研修機会を充実していきます。
- ・健全育成の意識を地域と一体となって醸成するため、連携団体との情報交流を推進します。

学識経験者の意見

放課後子ども教室推進事業と放課後児童健全育成事業を一体的に実施している先進的な事例であり、小学校の余裕教室を活用し、2事業を連携して実施することで指導体制を強化するとともに、充実したプログラムを提供しており評価できます。

今後は、多様な児童に対応するための研修会の開催、学校との定期的な情報交換を設定するなど、指導者のスキルアップと関係機関の一層の連携を期待します。

学校生活を終えた子どもたちが、放課後いろいろな体験活動ができるこの活動は、極めて重要です。地域の教育力を大いに活用するという観点からも、継続・充実に努めてもらいたいと思います。

地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業

現状と成果

町民のボランティア意欲をまちづくりや生涯学習活動に活かす「生涯学習ボランティア登録・派遣事業」を平成14年度から実施しました。この事業は、個人が仕事や趣味で得た知識や技術を町民の学習活動に還元したいという方や、教育事業や教育施設に対して貢献したいという方を登録し、学習講師や活動支援として求める町内の団体・組織に派遣します。この学習成果の還元と人と人を結びつけることにより、互いに学び合えるまちづくりを促進することをねらいとした事業です。

社会教育分野での派遣要請は僅少であります。芸術分野等の専門性が求められるボランティアに対しての要請がありました。

登録者は、芸術文化やスポーツ、教養などの分野で69人おり、学校教育活動に対する支援者が増加しました。

活動の様子を広く町民に広報することにより、ボランティア活動が広く認知されるようになり、活動の評価につながりました。

このように、生涯学習ボランティア事業による町民の学習活動に対する支援の仕組みを構築した成果であり、協働のまちづくりが着実に推進されている表れであります。

今後の課題

- ・継続したボランティア活動を推進するためには、活動者や学校等の負担軽減と活動における手当てが必要です。

今後の対応策

- ・ボランティア意識を高めるために、活動が社会から評価される仕組みをさらに検討します。
- ・新しい地域づくりのため、ボランティア活動を含めた人々の意欲と責務を喚起することを検討します。

学識経験者の意見

町民の学習機会の提供と学習成果の活用を図る取組として、学校教育、社会教育でボランティア活動を実施しており、地域が一体となってまちづくり・生涯学習を推進する取組として評価できます。

今後は、活動分野ごとのプログラム作成、学校や団体へのプログラムの提案など、活動を広く啓発する取組の充実に期待します。

地域の教育力を活用するという観点から、この事業は大いに評価できます。もちろん、基本は学校の要請に基づき派遣されるべきことですが、学校の質的向上が期待できるため、多くの人たちが携わるよう広報活動に努めていただきたいと思います。

子ども達への読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

現状と成果

図書館の読み聞かせボランティアとして平成4年に結成された『五月会』ですが今年度20周年の節目を迎えました。会員は現在6名で、月2回の図書館でのお話し会を基本に、小学校・幼稚園・保育所のほか、お話し会の参加ポイントカードの配布も継続しており、安定した活動をしています。

また、昨年につき7月と12月に小学生の読み手としてのお話し会への参加があり、子どもたちと地域との交流が生まれました。

今年度は、新得町で活動している読み聞かせグループとの情報交換会や、ボランティアの新規開拓を目指し、紙芝居、絵本の読み方を学んでもらう講座を開催したほか、乳幼児7、8ヶ月検診に組み込まれているブックスタート内でチラシを配布するなどの活動を行いました。

学校図書館との連携では、清水小学校の図書館ボランティア『プレコの会』への活動支援や各学校からの資料相談、貸し出し支援、9月から清水中学校への移動図書館もスタートし、全小中学校への支援体制が整いました。

(H23年度お話し会(12月末現在) 16回開催、延べ280名参加)

(講座「演じてみよう紙芝居」8名、「豊かな心を育てる読み聞かせ」10名)

今後の課題

『五月会』は安定した活動をしていますますが、会員が増えているわけではないため、活動の停滞が心配されます。広報やPRチラシなどで会員の募集を随時行っていますが、増員までには至っておりません。今後も継続して、読み聞かせの楽しさを体験してもらえるようなきっかけ作りをする必要があります。

今後の対応策

- ・引き続き、読み聞かせ用の資料・情報提供などの活動支援を行います
- ・講座を継続して行うことで新たな読み手の発掘につなげます。

学識経験者の意見

平成4年から継続的に実施しているお話し会を活動の軸とし、近隣町の団体との情報交換、学校図書館への支援など、関係機関・団体との連携体制を新たに整えており、子どもの読書活動を推進する取組として評価できます。

今後は、学校・家庭・行政の役割を明確にし、3者が連携した「朝読」「家読」などを推進する取組に期待します。

幼児期にとって、この活動は極めて重要な位置を占めます。各団体やグループ等と連携を図り、参加者を増やす努力をしていただきたいと思います。